3/26/93

Ｐ・ティリッヒの神学体系と神の問題

大阪市立大学　芦名定道

内容

Ⅰ．ティリッヒの宗教思想の特徴と研究方法
Ⅱ．「神の問題」の発展史
Ⅲ．『組織神学』の構造と「神の問題」
Ⅳ．ティリッヒ神学の意義

1：宗教研究（広義の宗教学）――経験科学としての宗教学（狭義の宗教学）・宗教哲学
（古典的／宗教本質論→宗教史の構成）・神学
2：弁証神学者ティリッヒ――①メッセージの普遍的意義　②新しい表現形式の必要性
3：20 年代前半の時期の体系構想――意味の形而上学にもとづく「形式－内実」モデル
50 年代の『組織神学』――存在論的人間学に基づく「問い－答え」モデル
4：基本的特徴―― 1.包括性、2.体系性、3.発展性
5：ティリッヒの思想のトータルな理解　→　体系の再構成＋発展史の分析
6：「神の問題」――①人間存在の分析→神の問い（存在の意味と根拠の問い）
②神の意味、「神」の現象学
③答えとしてのキリスト教の神の解釈（神論）
7：神と人間の差異と一致の対立　→宗教史のプロセスにおけるキリストの出来事（キリストの絶対的人格の逆説性）
8：「弁証神学プログラム」→具体化
9：ティリッヒの思想の発展史の時代区分

初期	：～ 1918	プログラムの提出
前期Ⅰ	：1919 ～ 1925	プログラムの具体化(1) →モデルⅠ
前期Ⅱ	：1926 ～ 1933	思惟の移行期
中期	：1934 ～ 1945	〃
後期	：1945 ～ 1960	プログラムの具体化(2) →モデルⅡ
晩年期	：1960 ～ 1965	思惟の移行期

10: 「意味の形而上学」　→　神学体系
23 年『諸学の体系』：宗教を対象とする学問（精神科学に属する）としての宗教学
宗教哲学（本質概念・機能・カテゴリー）→[1925a]
宗教史（歴史研究　→　意味連関の構成）→[HCT]
神学（体系学）→[1925b] 、『組織神学』
11:「教義学は我々に無制約的に関わるものについての学的な語りである」（命題１）
「我々に無制約的に関わるものについての語りの一切は無制約的なもののの我々に対する告知に基づく。教義学の対象は啓示である」（命題４）
12: 「啓示相関」(Offenbarungskorrelation)
13: 神学基礎論（教義学の本質）
第一部：「完全な啓示における自然的なものとしての存在するもの（創造について。

神学的な存在解釈）

第二部「完全な啓示における歴史的なものとしての存在するもの（救済について。神学的な歴史解釈）」

第三部「完全な啓示における自然性と歴史性の存在の彼方（完成について。神学的な意味解釈）」

14: 第一部：創造（即本質 Wesensgemäßes）・堕落（反本質 Wesenswidrigekeit）・現実存在（両義性 Zweideutigkeit）

Ⅰ：純粋な被造性における存在するもの（原状態）

a)創造的なものの限界　b)被造物の完全性（無からの創造）

Ⅱ：存在するものの起源としての無制約的な存在者（神の力、神の神性）

a)無制約的なものの無制約的な固有力性（自存性）

a)無制約的なものの無制約的な世界力性 Weltmächtigkeit（全能）

15: [1919], [1923],[1925a,b]→[1927/28],[1930],[1935a],[1935b],[1938?]→[1947]

16: 「神の存在は存在自体である」([1951a:235]) ＝＜命題A＞

17: 「状況の分析→問いの定式化→問いに対する答えとしてのメッセージの解釈」

18: 「＜神＞は人間の有限性に含まれた問いへの答えである」(ibid.: 211)

「神」＝「人間に究極的に関わるものの名(name)」(ibid.:211)

19: 「神の名」（＜神＞象徴）＝究極性＋具体性（両極構造）

存在としての神（命題A）→ 生ける神(ibid.:241 ～)

「人格神」

20: 存在の根底・存在の力、超存在、存在の彼方、無

21: analogia entis（命題A　→　神について具体的に言表する可能性）

22: 人格－個別化(Individualization)・個別性（分離）　cf: 参与

23: 「父なる神」と「主なる神」(ibid.:286 ～ 289)

「主」モデル　→象徴領域（象徴群）：王、審判者、至高者

「父」モデル　→象徴領域（象徴群）：創造者、救済者

originating/sustaining/directing

24: 相補性・相対性　→　①モデルの複数性　②モデルの歴史的開放性

25: 神の正義と神の愛　→　正義と愛 [1954]

26: 「父」モデルと「母」モデル（＜存在の根底＞の母性的資質　[1963:370]）

27: 「男性」モデルと「女性」モデル

28: モデルの両義性　→　モデル（←＜神＞の具体性）に対する究極性の極の確保([1963:294])

29: 君主的家父長的モデル　→母・愛する者・友モデル

30: モデルの再解釈・修正・拡張（統合）

31: キリスト教の自己同一性と状況適応性　→　弁証神学（メッセージと状況の相関）

＜文献表＞

A：ティリッヒ

1908: Welche BedeutunghatderGegensatz von monistischer unddualistischer

Weltanschauung für die christliche Religion ?,in: Anton Bernet-Strahm[1982: 4* ～ 45*]
1910: Die Religionsgeschichtliche Konstruktion inSchellings positiver Philosophie, ihre Voraussetzungenund Prinzipien.Breslau
1912: Mystikund Schuldbewußtseinin Schellings philosophischerEntwicklung,
1913: KirchlicheApologetik(in:MW.6)
1913/14: Systematische Theologie(in:MW.6)
1919: Über die Idee einerTheologie der Kultur (in:MW.2)
1923: Das SystemderWissenschaften (in:MW.1)
1925a:Religionsphilosophie (in:MW.4)
b:Dogmatik. Marburger Vorlesung von1925.hrsg.v.Werner Schüßler. Düsseldorf
1927/28:Die Gestalt der relogiösenErkenntnis (in:Clayton[1980:269 ～ 308])
1930: Christologie undGeschichtsdeutung (in:MW.6)
1935a:WhatisWrongwiththe“Dialectic”Theology? (in:JR.vol.15,No.2)
b:Natural and Revealed Religion (in:MW.6)
1938?:ReligionundWeltpolitik (in:GW.IX)
1947:TheProblemofTheological Method (in:MW.4)
1951:Systematic Theologyvol.1(=ST.1)
1954:Love,Power,and Justice.New York/London
1963:Systematic Theologyvol.3

B: その他

1.**芦名定道**
1989: 「P.**ティリッヒと神の問題**(1) 」(『**人文研究**』**第** 41 **巻第７分冊**)
1990: 「P.**ティリッヒと神の問題**(2) 」(『**人文研究**』**第** 42 **巻第３分冊**)
1993（**予定**）: 「**宗教的認識と新しい存在**」(『**哲学研究**』559 **号**)
1993: 『P.**ティリッヒの宗教思想研究**』(**未刊行**)
2.Clayton,John Powell:
1980:The Concept of Correlation.Paul Tillich and the Possibility o f a Mediating Theology.Berlin/New York
3.McFague,S.:
1987:Models of God.Theology for an Ecological,Nuclear Age.Philadelphia
4.Stenger, MaryAnn:
1984:A Critical Analysis of the Influence of Paul Tillich on Mary Daly's FeministTheology (in:TA)
1989:The LimitsandPossibilitiesof Tillich's Ontology for Cross-Cultural and Feminist Theology (in:GB)
5.Bernet-Strahm, Anton:
1981:Die Vermittlung des Christlichen. Frankfurt a.M.